

IPC2016 Fukuoka を終えて

IPC2016プログラム委員長, 九州支部支部長
北九州市立大学国際環境工学部, 教授 **櫻井和朗**

平成27年2月の小雨が降る寒い日、国際交流委員長としての最後の会議を終えて、築地の安い飲み屋で恒例となっていた反省会。「中先生(京都工芸繊維大、前国際交流委員長)、委員長のお仕事リストにIPCのプログラム委員長ってありますよね、あれ、なんっすか? 委員長の任期が終わった後ですけど? ……」 「え、ゆうたでしょ、IPCのこと」「え、そんなん、ゆうてました? 単なるプログラムを作るだけなんですよ、年会や討論会のように、事務局のマニュアルに従って、ハイハイと言っていれば楽勝でしょ」「ちゃいますよ、ゆいましたよ、前に、めっちゃ大変って、だいたい、櫻井さん、筑波のIPC2014に来てへんかったでしょう」「え……」から始まったIPC2016であった。あてにしていた科研費がはずれ、科研費のために企画した同時通訳付きの公開プレナリー講演が残ってしまった。抜いた刀を納めるどころがなくなり、お金をどうする、学会はこの年度、大きな赤字決算で終わろうとしていた。

前学会長がIPCの組織委員長になる慣例で、幸いにも高原淳先生(九大)が組織委員長に就かれ、リーダーシップを発揮され始めた。第1回の組織委員会を開いて、プログラム委員会は海外からの招待講演者の選定と依頼に専念することになった。正確には、予算の都合上、全部の交通費や宿泊費の負担ができないから、ボランティア覚悟で来ていただくことを理解していただける著名な先生をプログラム委員の先生のコネクションを使って選定し、来日をお願いをしていく作業をする。現地で実際に会議を運営するのは実行委員会、これを強力な組織にするために、前九州支部長の菊池裕嗣先生が就任された。また、プログラム委員の各セッションの主査の先生には実行委員を兼務していただき、IPCへの参加の呼びかけを全国レベルでしていただくこととなった。幸いにも(不幸と言うべきか……)、筆者が九州支部の支部長を仰せつかり、支部の中での体制は固まっていった。しかし、平成28年4月に熊本を大地震が2度襲い、熊本大学も大きな被害にあった。これで、支部機能の一部が麻痺したのは痛かった。5月の年次大会(神戸)で開いた第1回実行委員会で、ようやく全体像が固まり、あとは、多くの人に参加いただいて赤字にしないことがプログラム委員会の大きな任務となった。高原先生のアイデアで、海外からの講演件数を増やすためにIPCのサテライトシンポジウムを開き、

そこで招待した先生方に一般講演としてIPCに参加いただいた。前年、高分子学会から50周年のお祝いのプレートを贈呈したUmassのPSEから多くの先生に来ていただいたのは本当にありがたかった。

学会初日は雨が降る寒い日だったにもかかわらず、多くの参加者に来場いただいた。基調講演は、一般に公開して、福岡市内の高校に参加を呼び掛けたが、平日であるため会場には高校生はいなかった。また、市政だよりなどに掲載して宣伝をしていただこうと考えていたが、後手に回って、一般の参加者はきわめて少なかった。しかし、学会関係の研究室の4年生から大学院生に多く参加していただいた。また、英語での同時通訳の機械も30台近くの貸し出しがあった。内容は下のポスターを参照していただくとして、新海征治先生の「日本人は各論が得意だが、総論や新しいコンセプトの提案は下手だ。First oneではなく、Best oneにならないと世界では認められない」の言葉に多くの人は自戒を込めて学ぶものがあつたと思う。

第11回 国際高分子会議 (IPC2016) 

高分子科学の最先端技術とこれから

「IPC2016公開シンポジウム」

日時: 2016年12月13日(火)
会場: 福岡国際会議場
入場: 無料

日本語
英語同時通訳

15:00-16:00
「世界で最も明るいX線を利用した先端科学」
● 高田 昌樹 先生 (東北大学多元研教授)

16:00-17:00
「環境問題にとりくむ化学会社」
● 坂田 信以 先生 (住友化学株式会社 執行役員)

17:00-18:00
「小さな分子がつくる大きな世界」
● 新海 征治 先生 (九州大学高等研究院 特別主幹教授)

主催 公益社団法人 高分子学会 共催 九州大学 先端物質化学研究所 九州大学 カーボンニュートラル・エネルギー国際研究所 九州大学 分子・物質合成プラットフォーム 九州大学 未来化学創造センター 九州大学 分子システム科学センター 九州大学 高等研究院

連絡先 E-mail: nano_office@mail.cstm.kyushu-u.ac.jp

図1 公開講座に使ったポスター

水曜日からは3日間の講演とポスターが始まった。すべてを含めた発表申し込み件数が786件となって、ポスター会場も口頭発表のスケジュールもほとんど満杯となった。参加いただいた方々にプログラム委員会、組織委員会、実行委員会を代表して、心から感謝したい。発表件数が多いため、最終日の5時まで口頭発表のスケジュールを入れざるを得なくなった。セッションによっては、最後の講演に有名な先生をわざと配置して、聴衆が残る作戦をとっていたところがあった。「僕を最終日の最後にするなんて、嫌がらせ……」と言われる先生がおられたが、筆者が決めたことではありませんので、悪しからず。

口頭発表の会場は、どこも素晴らしい発表と、熱気にあふれた質疑応答がなされていた。これは、お世辞でも自画自賛でもなく、多くの海外の方から同様の感想を聞かせていただいた。若い世代の日本人が活発に質問をしていて、ようやく、文科省の英語強化策が少しだけ、効果があらわれてきたような気がした。海外の学会に行くと、時々、ドタキャンの発表辞退でプログラムに空白ができたり、数名の聴衆だけのときがあるが、そんな会場はどこにもなかった。



図2 Boeing社のBenson Tolle博士の講演

IPCの目玉の一つは、Benson Tolle博士 (Director of Advanced Materials, Product Development at Boeing Commercial Aircraft) の講演であった。筆者は所用で聴くことができなかったが、素晴らしい発表であったと大勢の方から聞いた。また、図2の写真を今後、高分子学会が使う許可を得る際に、説明に付けた筆者の英語を直していただき、

I feel I can better advocate the conference by sharing my good experience. Actually, perhaps more inspiring to the members of the society would be: "Dr. Tia Benson Tolle from Boeing gave an invited lecture in IPC2016 in Fukuoka. She emphasized how polymers, carbon fibers, and polymer matrix composites are important in designing airplanes and automobiles, and

discussed the challenges and opportunities that these materials will have in the future." (原文そのまま)とのメールをいただいた。

海外からの招待講演者は、皆さん多忙な方が多く、招待講演の枠がなかなか固まらない。中先生の「めっちゃ大変」の一部がよく理解できた。メールがなかなか返ってこない、友人がノーベル賞をとったのでそのお祝いのためにストックホルムに行くからキャンセル、ビザが間に合わないからキャンセル、その日は都合が悪いから変えてくれ等、免税措置の書類の到着をイライラしながら待っている事務局も含めて、プログラム委員会の中では開会してもプログラム変更の連絡メールが飛び交っていた。

ポスター会場は若い学生の熱気であふれていた。口頭発表の申し込みが枠いっぱいだったので、口頭発表と重ならない時間は、12時から2時までのお昼休憩の時間だけだった。今回は、IPCポスター賞以外に、冠付きの賞をさまざまなスポンサーからいただいた。BioConjugate賞をACSからもってこられた河野健司先生(大阪府立大学)がIPCの直前に亡くなられた。お弟子さんや学生さんによって河野先生の功績を讃えるポスターが作られ、3日間、会場の片隅から、若い人の発表を見守っておられた。この場を借りて改めてご冥福をお祈りしたい。

企業の展示ブースや広告を集めて、大会の開催資金を集める予定だったが、これも、後手後手に回ってしまった。展示ブースや広告で収益性を上げる工夫は、海外の国際会議は上手である。たとえば、10月にフランス・グルノーブルであったISCM2016 (<http://www.ismc2016.org/>) は29社にスポンサーになってもらい、集まり過ぎるくらい資金が集まったそうである。そのためか、バンケットの余興はアイスダンスだった。このあたりの収益方法は見習う必要がある。

バンケットは300人近い人が集まることから、予定していたホールの廊下にも、飲み物や食べ物を置いて廊下も会場として使うことにした。九州の美味しい食べ物を十分に堪能していただいたと思う。余興は、お金がないので、九大の学生さんに、博多祝い唄を歌っていただき、筆者も含めて地元実行委員が壇上にあがって、博多一本締めをした。後から思うと、山笠の半被くらい着れば良かったと後悔している。プロのアイスダンスに比べようもないが、参加者も巻き込んだ一本締めは喜んでいただけたと思う。

最後になりますが、ACSからはBioconjugate ChemistryとLangmuir賞、RCSからはPolymer Chemistry、Soft Matter、Material Horizons賞、Springer Nature社からはPolymer Journal賞、北九州産業学術推進機構からは、環境エネルギー賞、福岡県産業・科学技術振興財団からはベストプロダクト賞、九州先端科学技術研究所、先進ナノバイオ賞をご提供いただきました。お礼申し上げます。